

『行人』論（下）

——物語構造をめぐって——

中村直子

はじめに

従来、前作『彼岸過迄』の場合と同様に『行人』もまた、物語構造上の破綻、亀裂をしばしば指摘されてきたのであるが、それらの破綻、亀裂は、『行人』を「一郎説話」あるいは「二郎説話」として捉えようとする不自然から生じたものであると言える。

物語構造に対して意識的に、その物語世界を読み解いていくと、じつは『行人』が、一郎の物語でも二郎の物語でもなく、一郎と二郎、そしてお直との間に生成される《関係性の物語》⁽¹⁾であることが明らかになる。三人の間に生成された《関係性の物語》については、前稿で詳しく検証したわけであるが、本稿では『行人』の物語の生成に密接に関わっている《物語構造》について、とくに『行人』における「友達」の章のもつ意味、語りの現在、そしてHさんの手紙の機能などを中心に考察を加えていきたい。

また、『行人』の物語構造を検証するにあたっては、『彼岸過迄』において作家・漱石が試み、提示した物語構造との関連性にも注目したいと思う。

『行人』は前作がそうであったように、「友達」「兄」「帰ってから」「塵労」という複数の短篇の連鎖によって物語が成立しているために、『彼岸過迄』の場合は「緒言」にも標榜された短篇連叙の方法が、『行人』でも踏襲されているかのような印象を与える。さらに、一郎が母の使いとして大阪の岡田を訪れるという『行人』の物語世界の幕開けも、『彼岸過迄』の敬太郎に物語世界の誘導者としての機能が担わされていたことを連想させ、使者としての二郎がいろいろな人物を訪ねる短篇連叙の物語としての『行人』の可能性を予感させて、甚だ興味深いものとなる。この可能性は、『兄』以降の章によって完全に否定されるのであるが、物語の幕開けにおいては、敬太郎の無聊や好奇心に相当するものとして、使者の役割が用意されたような印象を読者は受けるのである。実際、「友達」における二郎の存在は、岡田や三沢の語る物語世界の傍観者、観察者的である⁽³⁾。

そして、「友達」において二郎が傍観し、観察するのは、「岡田夫妻の今昔^{こんじやく}」を通しての《結婚》であり、三沢の語る物語である。岡田に関しては、一郎とお直夫婦との対称的な存在として配置されたものと捉える評家が多く、その対称性はしばしば、物語世界の後半において明らかにされる、一郎の苦悩と結び付けて論及される。しかし、ここで特徴的なのは、二郎の観察を通じて読者に強く印象づけられる、二郎の《結婚》に対する執拗なこだわり方であろう。岡田夫妻や佐野の普遍的な結婚のあり方に対する驚きと不信といった形でのこだわりが、二郎の語りの中で繰り返し示されるのである。

二人から斯う事もなげに云はれた自分は、それで安心するよりも却って心元なくなつた。／「何がそんなに気になる

るんです」と岡田が微笑しながら煙草の煙を吹いた。

〔友達〕一〇〇

『明暗』の津田が「それでよく結婚が成立するもんだな」（二九）と口にした時、彼の内部にお延や清子との物語が秘められていたように、二郎の《結婚》に対する執拗なとまどいやこだわりのにも、これから展開する『行人』の物語において二郎が抱くことになる感慨と繋がるものが秘められていることは、容易に想像される。換言すると、『行人』における岡田の機能とは、《結婚》に対する二郎のこだわりを導き出し、『行人』の物語世界の予兆として、読者に印象づけることにあると言えるわけである。

そして、『友達』において三沢が語る「あの女」と「娘さん」を巡る二つの物語には、そのいずれにもこの後に一郎と二郎、お直の間に生成される《関係性の物語》と呼応するものが秘められていることが指摘できるのである。まず、『あの女』の物語の中で三沢が二郎に告げるメッセージは、次の一節に秘められている。

知らないんだ。向は僕の身体を知らないし、僕は又あの女の身体を知らないんだ。周囲に居るものは又我々二人の身体を知らないんだ。それ許ぢやない、僕もあの女も自分で自分の身体が分らなかつたんだ。（『友達』一一一）

「人と人との距離の遠さ——人と人とはとうてい正しく理解し合えないものだということが語られている。」⁽⁴⁾という片岡良一氏の論及に加えて言うならば、ここには、『明暗』において津田が抱く、「此肉体はいつ何時どんな変に会はないとも限らない。それどころか、今現に何んな変が此肉体のうちに起りつゝあるかも知れない。さうして自分は全く知らずにゐる。恐ろしいことだ」（二二）という感慨と通じる、いわば人間存在の根源的な不可思議に向けられた畏

怖の念なのである。

一方の「娘さん」の物語は、二郎たち三人の間で生成される《関係性の物語》に、いっそう深く繋がるものを内包している。この物語は、後に二郎と一郎の間で再び持ち出され、本稿の次章でも論ずる「噫々女も氣違いにして見なくっちゃ、本体は到底解らないのかな」（兄「一二」という、一郎の絶望へと結び付いていくのである。また、同時に、「娘さん」の物語にはもう一つ、二郎の中に存在するお直との物語を伏線として暗示するという機能が指摘できる。

僕が怒らうと思つて振り向くと、其娘さんは玄関に膝を突いたなり恰も自分の孤独を訴へるやうに、其黒い眸を僕に向けた。僕は其度に娘さんから、斯うして生きてゐてもたつた一人で淋しくつて堪らないから、何うぞ助けて下さいと袖に縋られるやうに感じた。——其眼がだよ。其黒い大きな眸が僕にさう訴へるのだよ。（「友達」三三）

『それから』の三千代の「淋しくつて不可ないから、又来て頂戴」（一二）という言葉想起させるこの一節は、二郎にとっては重い意味をもつものであったのではないか。「黒い眸」は、二郎の眼にはお直の「淋しい片鱗」（兄「六」）に重なって浮かぶものだったのではないだろうか。『行人』において、この「娘さん」の物語は随所に引き出されるのであるが、少なくともそれだけこの物語に託された伏線としての意味が大きいものであるということは言えるであろう。とくに、この物語が後に「もし其女が今でも生きて居たなら何んな困難を冒しても、愚劣な親達の手から、若しくは軽薄な夫の手から、永久に彼女を奪ひ取つて、己れの懷で暖めて見せるといふ強い決心」（帰つてから「三一」という言葉を再び物語の中に導き出す時には、三沢の娘さんに対する思いと二郎のお直に対する感情との重層性を、

読者に意識させずにはおかないのである。

以上に述べてきたことを概言すると、すなわち、「友達」という章の機能は、『物語の導入』であり、『彼岸過迄』における「風呂の後」の機能とほぼ同じものであると言える。また、「友達」に限って言えば、二郎は、敬太郎の存在にきわめて近い存在であると考えられるのである。

しかし、『行人』は以下の三点において、『彼岸過迄』とはその物語構造を異にしている。まず、『彼岸過迄』では、その物語構造の特徴の一つに、複数の語り手による連叙が挙げられたのに対して、『行人』の方は、「塵労」におけるHさんの手紙の部分を除けば、一貫した二郎による一人称の語りでなされた物語であるということが指摘できる。

もう一点異なるのは、敬太郎が物語世界の生成に関与しない、いわゆる傍観者の位置に終始したのに比して、二郎は語り手であると同時に、物語の生成者でもあるという点である。

三点目は、物語の時間的構造である。『彼岸過迄』においては、語りの現在に重層する形で、それぞれの篇の中に『過去』の物語時間が内包されていた。また、各篇の物語時間は、各篇ごとに閉じ、時間的継続を全体として連鎖させるといふ形式をとっていた。そして、物語世界に数多く散布された指標も、連叙という形式のために統一性を欠きがちな各篇の関連性、連続性を強化するとともに、重層的なしかけをもった時間構造を特徴づける結果となっていた。しかし、『行人』の方は、何度か回想時点『今』の二郎の意識が介入する以外には、過去の時間の流れに沿った一定の方向性を保って物語は進行する。各篇の連鎖を強めるように散布される指標も、伊豆利彦氏の次の指摘にもある「賛」などのわずかである。

この三人は相互に関連しあって恐るべき悲劇におちこんでいった。父が二郎に与えた絵の「この棒ひとり動かず、

「さわれば動く」という賛（「塵勞」七）はこの相互関係を暗示している。⁽⁵⁾

結論づけて述べるならば、以上の点からも明らかなように、作家・漱石は、「友達」やHさんの手紙という部分では『彼岸過迄』の構造を継承しつつも、『行人』においては総体的な意味では『彼岸過迄』で試みた短篇連叙という方法を選択しなかったと言えるのである。

二

『行人』が、二郎とお直の物語を宙吊りにしたまま、その物語世界を終えたことについては、前稿で検証したが、それでは、語りの現在、物語はどのような形で受け継がれているのだろうか。

『行人』は、Hさんの手紙によって、その語りの時間を閉じている。Hさんの手紙は三人の物語の結末を告げずに終わっているため、その結末を読者が推定するのは、一見、不可能であるかのように見える。しかし、実際には二郎の語りの中に、語りの現在を知る手掛かりが隠されているのである。すなわち、物語世界に極めて突然な形で介入する回想時点《今》の二郎の意識である。

和歌山行までの『行人』は、重層的時間構造をもっていた『彼岸過迄』とは異なり、物語は、過去の時間の流れに沿って回想され、語られるものであった。ところが、和歌山行を境として、《今》の二郎の意識が突然介入するようになるのである。物語世界にはじめて回想時点《今》の二郎の意識が介入してくるのは、和歌山行の報告の場面である。

自分は此時の自分の心理状態を解剖して、今から顧みると、兄に調戲ふといふ程でもないが、多少彼を焦らす気

味でゐたのは慥である。と自白せざるを得ない。尤も自分が何故それ程兄に対して大胆になり得たかは、我ながら解らない。恐らく嫂の態度が知らぬ間に自分に乗り移つてゐたものだろう。自分は今になつて、取り返すこと事も償ふ事も出来ない此態度を深く懺悔したいと思ふ。

〔兄〕四二

二郎が、「取り返す事も償ふ事も出来ない」と回想している一郎の《今》とは、一体どのようなものであろうか。Hさんの手紙に見られる一郎の言葉に、「死ぬか、気が違ふか、夫でなければ宗教に入るか。僕の前途には此三つのものしかない」(「塵勞」三九)とあるように、現在の一郎がそのいずれかにあることは、想像に難くない。

しかしながら、「神は自己だ」「僕は絶対だ」(「塵勞」四四)という一郎の言葉を考えると、彼が宗教によって救済され得る人間とは考えられない。「宗教に入る」という選択項が除外されるならば、自殺はどうであらうか。一郎の現在に關しても、先行研究によって様々な論究が加えられてきたが、伊豆利彦氏は、「乱暴な推測」と断つた上で、「お直は狂氣の一郎によって殺され、一郎もまた自殺する」と自殺説を立てている。大岡昇平氏も、次作品『こゝろ』との關連から「二郎とお直が結ばれ、一郎は絶望して自殺する、遺書があつて二人は罪の深さを自覺する」と述べている。だが、『行人』の物語世界は、その細部の表現において、宗教に救済を求める方法のみならず、自殺説をもおのずと否定している。たとえば、二郎の《今》の意識が回想の物語に介入する部分に次の一節がある。

自分は今でも雨に叩かれたやうなお重の仏頂面を覚えてゐる。お重は又石鹼を溶いた金盥の中に顔を突込んだ
としか思はれない自分の異な顔を、何うしても忘れ得ないさうである。

〔帰つてから〕九

この場面は、《今》の二郎と妹お重が、現在もなお、二人で當時を回顧できる關係にあるということを示している。

考えられるのだが、「嫂を敵の様に振舞」(「帰つてから」七)、「兄に同情が強い」(「帰つてから」一〇) お重が、一郎を裏切ってお直と結ばれた二郎との間に、このような回想の語らいをするとは想像し難い。もし、二郎がお直と結ばれたとするならば、二人は当然の結果、『門』の宗助とお米の場合以上に、世を忍ぶ身の上になっているはずである。当時の家族制度に言及するまでもなく、まして、長兄びいきのお重との間に、兄妹関係が保たれているとは考えられない。

つまり、この短い一節から、読者は、二郎の「懺悔」の内に秘められた一郎の『悲劇』が、二郎と長野家の間に断絶をもたらす類のものではなかったことを窺い知ることができるのである。また、『今』のお直も、二郎とともに当時の一郎に関わる回想に加わっていることを「其時兄は常に変らない様子を、(嫂に評させると常に変らない様子を装つて、)」「(兄)四二」という一節に示されるように、お直が一郎を評している現在を考慮して推定できないであろうか。この一節からは、先に例示した部分とは異なり、必ずしも『今』が明確に示されていないが、二郎とお直とが当時を回想していると推定することは十分に可能であると思われるのである。お直もまた、二郎との関係性を、おそらくは長野家の一員という形で保っているものであり、決して一郎に殺されてなどはいないであろう。

さらに、一郎の自殺を否定するものとして、「けれども書斎に入つた彼女(お貞さん——筆者注)が兄と差向ひで何んな談話をしたか、それは未だに知ることは得ない。自分丈ではない、其委細を知つてゐるものは、彼等二人より以外に、恐らく天下に一人もあるまいと思ふ」(「帰つてから」三四)という一節から、現在、一郎が生きていること、および生きていながらも何事も語り得ない状態にあることを示唆していると考えられるからである。

以上のように考えると、「死ぬか、気が違ふか、夫でなければ宗教に入るか」という三つの道に関して残されたのは、一郎発狂説である。つまり、精神に異常をきたしたために隔離されている一郎に関して、二郎、お重、お直等が発病

以前を回想しつつ一郎に思いを馳せている、それが長野家の《今》であると筆者は考えるのである。たとえば、

自分から斯ういふと兄を軽蔑するやうで甚だ濟まないが、彼の表情の何処かには、といふよりも、彼の態度の何処かには、少し大人気を缺いた稚氣さへ現はれてゐた。今の自分は此純粹な一本調子に対して、相応の尊敬を払ふ見地を具へてゐる積である。

(兄) 四三

などという語りからは、「彼は聖者の如く只すやくと眠つてゐた。此眠方が、自分には今でも不審の一つになつてゐる。」(「帰つてから」二)とあわせて、一郎の現在の病氣に対する治療を意識した二郎が、一郎の精神状態を過去に溯つて確認している姿を窺い知ることができないのではないだろうか。現在の一郎が狂氣の中にあるとする推測は、「然し宗教には何うも這入れさうもない。死ぬのも未練に食ひ留められそうだ。なればまあ氣違だな。」(「塵勞」三九)という一郎の言葉とも照応する。

ところで、一郎と二郎、お直の三人の《今》に付随する問題として、《今》とは具体的にいつのことであるかということが、しばしば論じられるが、《今》の一郎が狂氣の中にあることを考えると、物語世界の《現在》と、それほど時間的に隔たつてはいないのではないかと考えられる。

《今》の二郎を「懺悔」に駆り立てているものは何か。第一は、一郎を狂氣へと追い込んだことに対する罪の意識であろう。二郎は、二つの《場》で一郎を追い込んでいと言えるのである。一つは、《語りの場》においてであり、もう一つは、《物語生成の場》においてである。前稿で述べたように、二郎の語りは、一郎の特殊性を強調し、周囲から疎隔しようとするはたらきをもつものであったが、その一方で、物語世界の二郎は、言葉や態度によって一郎を追い

詰めるはたらきかけをも行っているのである。次の一節にも、物語世界の二郎が一郎を、冷ややかに見据える眼差しによって追い詰めていく様子が明らかにされている。

自分はしばらく兄の様子を見てゐた。さうして是は与し易いといふ心が起つた。(中略)もう少し待つてゐれば自分の力で破裂するか、又は自分の力で何処かへ飛んで行くに相違ない。——自分は斯う觀察した。(「兄」四三)

二郎と一郎兄弟の間に生成される《関係性の物語》⁽⁸⁾は、「性の争ひ」(「友達」二七)をも含んだ、人間存在の根源に根差す争いの物語なのであり、兄を狂気の世界へ追い込むという結果によって、弟がこの争いの表面上の勝利者となったのである。たとえその争いが、「自分達の心付かない暗闘」(「友達」二七)によるものであったとしても、《今》回想をする二郎が、狂気の世界に生きる一郎の現在に対して、罪の意識を強くもっていることは、やむを得ないことであろう。

くわえて、二郎が罪の意識から逃れられないもう一つの理由としては、《今》の二郎が、かつては一郎固有のものであった苦悩を共有する存在になっているということが指摘できる。これは、なぜ物語世界への《今》の介入が和歌山行を境にして始まるかという問題と不即不離の関係にある。すなわち、和歌山行をともしたことによって、二郎はじめてお直が「解らなくなつた」(「兄」三九)であり、お直の中に「青大将」(「帰つてから」一)を感じるようになるのである。その結果、二郎は、

或は兄自身も自分と同じく、此正体を見届ようと煩悶し抜いた結果、斯んな事になつたのではなからうか。自分は

自分が若し兄と同じ運命に遭遇したら、或は兄以上に神経を悩ましはしまいかと思つて、始めて恐ろしい心持がした。

〔兄〕三九

と、一郎の苦悩と自分の将来を重ね合わせて予感しているのである。前稿で詳述したように、一郎のみならず二郎の中にも、かつて一郎が抱いた「噫々女も気違ひに見なくつちや、本体は到底解らないのかな」〔兄〕一二といふ嘆きに通じる感慨が生じはじめたことは確かなのである。二郎は、『語りの場』において「自分こそ近頃神経過敏症に罹つてゐるのではなからうか」〔帰ってから〕二九、「自分は余程前から事務所ではもう快活な男として通用しない様になつてゐた。」「自己と周囲と全く遮断された人の淋しさを独り感じた。」「〔塵勞〕六」という様に、きわめて一郎に近い存在としての自分の姿を示しているのである。

つまり、一郎の苦悩を共有するようになった《今》の二郎にとっては、Hさんの手紙を含む『行人』の物語を語ることは、一郎に向けての贖罪の行為であると同時に、不思議な人間存在に対する自己洞察に他ならなかったということである。

三

最後に、Hさんの手紙のもつ意味について考えたい。『彼岸過迄』もまた、物語の幕切れに須永の手紙を用意してはいたが、それは決して物語に十分に融化したものとは言えなかった⁽⁹⁾。そして、作家・漱石は『行人』において再び、手紙という形式を物語構造の上に効果的に用いることを試みたのであり、これがHさんの手紙であるわけである。「日常の次元をめくりつつ〈存在〉の課題に迫るとは、すでに『門』以来の作者の方法であつた⁽¹⁰⁾。」というのは、佐藤泰正

氏の指摘であるが、『関係性の物語』を、さらに個人の内的世界における『閉じた語り』によって掘り下げることに、作者・漱石の作家としての必然があったと言えるかもしれない。そして、『告白』こそが、『関係性の物語』の深層を明らかにし得る『語りの場』であったのであり、『行人』の物語世界を閉じるためには、一郎か二郎のいずれかが自らの内的世界を『告白』する必要があったと考えられるのである。

しかし、二郎には物語の語り手という形で『語りの場』がすでに与えられており、また、『今』の二郎が一郎の苦悩を継承する存在となっていることを考えると、『告白』は一郎によってなされるべきものとなる。二郎の語り手としての位置を変えることなく一郎の『告白』を物語世界に組み込むための最も有効な方法は、畢竟、書簡であったと言えるよう。

しかしながら、一郎と二郎の間に、かつてのような信頼関係が保たれなくなっている物語現在にあって、仮に一郎から二郎に宛てた『告白』の手紙を考える時、それは遺書を除いて存在し得ないであろう。だが、前章で考察したように、作者は物語を一郎の自殺に収斂させずに、宙吊りにしたまま幕を引こうとしているわけであり、結果として、『行人』における『告白』の手紙は、遺書ではあり得ない。そのために、Hさんの手紙という枠組みが用意されたと言えるのである。「自分は兄から今何う見られてゐるか、何う思はれてゐるか、それが知りたくって仕方がない」という二郎の思いを、「兄と一所に旅行される間、兄の挙動なり言語なり、思想なり感情なりに就いて、貴方の御観察になつた所を出来る丈^{だけ}詳しく書いて報告して頂く訳には行きますまいか。」（『塵勞』一二二）という依頼に繋げることによって、Hさんの手紙を物語に組み込むことを可能にしたのである。『行人』は、作者が『彼岸過迄』では達成することができなかった物語構造上のこの試みを、一つの形で成功させたものであると言えるのである。

しかし、その一方で『行人』は、根本的な問題をHさんの手紙に残すことになった。すなわち、語り手としてのH

さんの存在の傀儡性である。つまり、Hさんとは、一郎に《告白》の場を与えるために登場する傀儡的な存在でしかないということである。この傀儡性にこそ、Hさんだけが三沢や岡田のような姓ではなく、イニシャルで呼ばれる所以を解く鍵があると言えないだろうか。

《関係性の物語》である『行人』が、物語の終局に臨んで、物語生成のための関係性を少しも結ぶことのない存在であるHさんに語りを委ねてしまったことは、やはり『行人』の物語構造上の問題点として指摘せねばならないであろう。越智治雄氏の、

二郎に代わるHさんは、一郎と同様学究であり、しかも「鷹揚」（「塵労」十四）で、「重厚」（四十五）な人がらであって、一郎の相手たるにふさわしい。したがって、当然二郎の目を通して記述される一郎の相貌とは異なる面が現われるという予測が可能になる。⁽¹¹⁾

という論攷をはじめとして、語り手としてのHさんの存在性を高く評する先行研究も見られるが、あえて述べるならば、『行人』の物語世界がHさんに関して語る言葉は、「鷹揚」や「重厚」の範囲にとどまるものでしかないと言えるのである。一郎や二郎、お直は言うに及ばず、お重などに比しても、Hさんは、その存在を『行人』の物語世界の中に確立し得ていないのである。

畢竟、『行人』は、二郎とHさんそれぞれの《語り》の間で、その質的な齟齬を超克することができなかったのである。そして、先述のように結局のところ『行人』は一郎の自殺を許さなかったのであるが、手紙による一人称の《告白》を《関係性の物語》に組み込もうとする時、《遺書》は俄然として有効な構造上の枠組み、しかけとなる。

こうして、物語構造上の問題を残したまま、『行人』の物語世界に幕を引いた作者・漱石は、次いで『こゝろ』を生み出すことになるのであるが、『こゝろ』における物語構造上のしかけとなるのが《遺書》である。⁽¹²⁾ いみじくも、新聞連載当時、『こゝろ』の題名は『先生の遺書』であった。

注

- (1) 拙稿『『行人』論(上)―関係性の物語―』(東京女子大学紀要「論集」一九九二年三月)
- (2) 千石七郎氏は、『漱石の病跡』(勁草書房 一九六三年)において、『行人』という題の意味に関して「漱石の用いたのは使者、走り使いの意味である。」と指摘している。
- (3) すでに鳥居邦朗氏の『《作品研究》行人』(「国文学」一九六五年八月)に、『行人』の二郎もこの敬太郎と同型の人間として造られている。少なくとも「友達」の章に関する限りそう断定できる。」という論及がある。
- (4) 『夏目漱石の作品』(鷺の宮書店 一九六八年)
- (5) 『『行人』論の前提』(「日本文学」一九六八年三月)
- (6) 同上
- (7) 『小説家夏目漱石』(筑摩書房 一九八八年)
- (8) 詳しくは、上記(1)の拙稿『『行人』論(上)―関係性の物語―』において検証した。
- (9) 同上
- (10) 『夏目漱石論』(筑摩書房 一九八六年)
- (11) 『漱石私論』(角川書店 一九七一年)
- (12) 拙稿『『こゝろ』試論』(東京女子大学紀要「論集」一九九三年九月)